

■司馬江漢 しばこうかん 義経千本桜・1747＝	画家，思想家，科学者。日本初の銅版画と「世界図」。一級の文化人も，時代を先駆ける憂国ぶりで奇人扱いに。 江戸四谷に生まれる。本名は安藤吉次郎峻。 一般には，町人の出自とされているが，生涯の，人脈のレベルの高さ，広さや，幕府への問題発言をして，咎められないことなどから，極めて高い出自で，安藤氏に預けられて育ったとみるのが自然であろう。自らは，先祖は紀州の人で，市井において長じたとしか語っていないが，徳川吉宗が将軍になった際，田沼意次の父はじめ，紀州から連れてきた格の高い人物の末裔である可能性も高い。
徳川吉宗没・1751＝ 4歳：	
・ ・ ・ ・ ・ 1756＝ 9歳：	
大岡忠光没・1760＝13歳： ・ ・ ・ ・ ・ 1761＝14歳：	早くから，画業に才能を発揮， この頃，江戸狩野に入門して，伝統的な日本画を習得，
蘭銭初輸入・1765＝18歳： ・ ・ ・ ・ ・ 1770＝23歳：	この間，当代随一の人気浮世絵師鈴木春信の借家人の一人平賀源内の知遇を得たらしく，その紹介で，鈴木春信の門人になり，やがて，鈴木春重と称する浮世絵師として，優れた作品を遺す一方，やはり源内の友人で長崎帰りの南蘋派の唐絵師宋紫石にも入門し，漢画を学んで，一家を成すに至る。以後，源内の腰巾着的存在として，蘭方医杉田玄白ら錚々たる人物と交流，歴史に名を遺す人物になって行くのである。 春信が急死してしまうと， 源内に従って，秋田藩の江戸屋敷に出入りし，藩主佐竹曙山とともに，洋画(秋田蘭画)も習得。
田沼意次老中 1772＝25歳： 大原騒動・ ・ ・ 1773＝26歳： 解体新書・ ・ ・ 1774＝27歳：	この間，参府中のオランダ貢使の宿泊所で，出入り困難な日本橋の葉種御問屋の長崎屋を，源内に同行して訪ねるうち，当主の長崎屋源右衛門と濃密な関係を築くようになって，西洋の諸文献だけでなく，コンパスや寒暖計など西洋の品々も入手，のちに自ら，オルゴール，補聴器などを制作するなど，まさに，湯治の西洋文明を身につけて行き，日本人のあまりの遅れに危機感も抱くようになっていくのである。また，西洋の情報などを得たい諸大名とも接見することも多くなって行くだけでなく，何を話したか一切触れず，また，召し抱えにも応じなかったことなどからも，特別な出自であったと考えざるを得ない。 前野良沢に入門してオランダ語を学び，その後は，同門だった語学の天才大槻玄沢から学んで， 江戸参府のオランダ商館長チチングを，長崎屋に訪ねたか， ドイツ人の銅版画「ナポリ馬図」を入手。仙台藩主伊達重村の御前で，その場の求めに応じて描く“応命席画”で，傑作「和美人と和男子図」を描いて，殿自ら御簾の奥の御正室に見せに行くほど気に入られる。 再び，オランダ商館長チチングと長崎屋で面会，オランダの画家による「大画面法書」を贈られたらしい。 土佐藩主で名君の誉高い山内豊雍に招かれる。銅版画の制作に関わる文献を玄沢に読み解いて貰い，奥医師桂川甫周の尽力も得て，長崎屋から，硝酸を入手，＊日本最初の銅版画(エッチング)「三囲景図」を制作。 ラウケン親子の「人間の生業～職業百態」を入手し，愛蔵書となる。秋田藩主佐竹曙山との合作「西洋男女図」では，中心の男女図を描き，曙山は背景を描くに留まっている。 この頃から，日本初となる本格的な油絵(蠟画)を描き始める。 最高権力者松平定信をも平然と批判しながら罰せられなかったが，田沼意次との関係も深かったためか，その失脚の影響を避けるべく，油絵作品も携行して， 江戸参府中のオランダ貢使一行を長崎屋に訪ねて，外科医ストツツェルに会い，「ジャイヨ世界図」を模写させて貰った可能性があり，翌年にかけて，長崎に旅行，初めて，東海道を往復，自由奔放に制約もなく，本陣に泊まっていさえするほどであった。途中，罰せられた一人木村兼暇堂を訪ね，平戸では，藩主松浦静山に面会，静山自ら茶をたてて饗応されている。この折，佐賀で，藩士そ山領主馬と出会ったらしく，心を許し合う親友になって行く。商人に変装して出島に入り，長崎屋ですでに知り合いになっていた商館員と歓談。著作には，政治家や文化人に対する激しい批判の言葉が溢れ，師匠の源内までこきおろすほどながら，咎めを受けることがなかったが，桂川甫周が，漂流してロシアから帰国した大黒屋光太夫を聴取してまとめた「漂流御覧之記」を読んで批判した際，その矛先を，蘭学者の塾芝蘭堂全ての人たちに向けたため， ＊銅版により，日本初の世界図「奥地全図」を刊行。「天子国日本東都春波楼主人」と記す。
ラクスン来日・1792＝45歳 松平定信引退 1793＝46歳： オランダ 正月・1794＝47歳： ポートン来航・1796＝49歳：	蘭学者仲間嫌われ，大槻玄沢説の有力な烏有道人なる人物の「盲蛇」で激烈に非難されるも，芝蘭堂のオランダ正月の役者見立て番付では，とんでもない名がついているものの，前頭六枚目で，出入り禁止にもならず，＊その後も，甫周や玄沢とのつきあいが続くという不思議さ。芝愛宕山に，北斎の最高傑作「神奈川沖浪裏」に影響を与えたと言われる，油絵の代表作「相州鎌倉七里浜図」の額絵を奉獻し，町絵師を含めて，観客が殺到したほか，諸国の著名社寺に奉納して話題になり，名を広く知られるようになる。 この年，京都で「東海道名所図会」が刊行される。紀州侯に伺候し，「地球全図」「天球図」を示す。 和蘭陀茶臼(コーヒーミル)」を制作。近畿地方を旅し，再び，東海道を往復。 この年，十返舎一九の「東海道中膝栗毛」の刊行が始まる。 フェルメールが絵を描くにあたって活用したドンケルカモール(写真鏡)を，自ら造って，知人らに贈るようになるとともに，伝統的な淡彩に，洋画で習得した描写法を取り入れた優れた作品を描くようになる。
バゾノ来航・1804＝57歳： 青洲麻酔手術 1805＝58歳：	葛飾北斎が，東海道を主題とした揃物7種を刊行。 第五次の測量に旅立つ伊能忠敬を，川崎宿に訪ね，数学会会田算左衛門とともに，酒宴を催す。そして，九州の佐賀城下に到着した忠敬を，親友の佐賀藩士山領主馬に出迎えさせている。自著「和蘭通舶」で，画をつくる器として，ドンケルカモールを紹介するなどしていたが，
フェートン号事件 1808＝61歳：	樺太探検から戻って松前奉行配下の役人になった間宮林蔵が来訪したほか，軟禁状態にあった大黒屋光太夫や，蝦夷地探検で知られる幕府隠密近藤重蔵と親交するなど，極秘情報にたやすくアクセスできたように，自らも隠密的な存在であったことが窺える。
・ ・ ・ ・ ・ 1810＝63歳： ゴッポン拿捕 1811＝64歳： 高田屋拿捕 1812＝65歳：	この年，天台宗の高僧円通が「仏国曆象編」を刊行すると， 間宮林蔵と面会。この年成った「春波楼筆記」はじめ，思想，随筆文学の業績も多い。 京都に向かうのと合わせるように，円通に詰問状を送って，反撃に遭い，寺社奉行の家臣と偽ったことを問われて窮地に陥り，突然，京都を退去， ＊江戸に戻るも，執拗に追及されたことから，ついに，自身の死亡通知書を関係各所に配布し，以後，知人宅を転々と隠れ住みむ。その間，親友山領主馬宛ての書簡に’日本始まりて無き画法’で「日本勝景色富士」を描いたと表明していることから，ドンケルカモールを縦横に活用した，後に，広重が元絵としたことが明らかになった一連の絵，いわゆる「東海道五十三次」を制作し，
伊能測量終・1816＝69歳：	自著「天地理譚」のなかで，人間の眼球の構造を図解。伊能忠敬が江漢を援護するが如く，唯一の著書「仏国曆象編斥妄」を刊行したのを慰めとするように，
水野忠成老中 1818＝71歳：	没した。水戸徳川家の菩提寺でもある，染井の慈眼寺に葬られたことが，その出自を仄めかしている。 江漢の随筆を読んだ夏目漱石が’古の我が盟友に出逢えた如し’と感動し，ロナルド・キーンが’江戸の街角で，突然近代人とすれ違った衝撃’と称賛したことなどから，けた違いの人物であったといえよう。

中公シリーズ「日本の名著」，新潮日本美術文庫，「この人どんな人」，「没年日本史人物事典」，「日本の群像」，平凡社百科事典，山田風太郎「人間臨終図巻」，「目でみる日本人物百科」。對中如雲「司馬江漢 “東海道五十三次”の真実」で全面訂正。